



① 誘惑

源氏鶏太

東 方 社 版

火の誘惑



(乱丁・落丁の場合はお取替え致します)

昭和三十九年一月十日発行

定価三三〇円

著作者 源^{げん}氏^し 鶏^{けい}太^た

発行者 石渡磨須子

整版者 内田柳次郎

發行所 東京都文京区高田豊川町六〇
東方社

振替東京五七七四番
電話大塚 〇一八七三番
七〇三六番

(印刷・邦文堂印刷所)

火
の
誘
惑

源
氏
鶏
太

小長
説篇

火の誘惑

掌中の珠玉

寢室問答

伊豆子の場合

深淵

円舞

奔流

情炎

轉落

119 97 74 51 35 23 15 5

再 あ 山 光 遠 曉 地 野
び
こ だ の
こ
に 花 宿 陰 星 紅 熱 火

295 269 249 230 197 173 154 127

裝
幀

阿
部
龍
應

掌中の珠玉

一

水が悲鳴をあげている。

その水というのは、コップのなかの、クリーム色をした甘酔つばいあれ。コップには、ストロウが二本さしこんである。いつぼんはいかにも、意志の強そうな男の唇にくわえられている。もうひとつの方は女。この唇は、紅くぬられて、ちよつと野性的な、それ故にいつそう情慾に身もだえしている、といった風に、なかなか印象的である。

さつきから約十分。

男は堂々たる体格をしていた。顔は浅黒くて、引きしまつて、そのくせ、育ちのよさをかんじさせる鷹揚さが、明るい影のように漂っている。三十歳前後であろう。

女は小麦色の肌をしている。唇許のちよつとせん情的なところを別にすれば、二十歳ぐらいのビチビチはねるように新鮮で、愛くるしい。どつちかといえば、男好きのする顔である。

ふたりの顔が、ときどき、すれあうほど、寄せられている。

梅田新道をすこし東に折れた、喫茶店「ダイヤ」の午後である。

二月にしては、うらかな陽差しが、窓硝子を通して、差しこんでいた。客といえは、反対の隅の方に廿八、九歳の女がひとり、ひっそり岩波文庫風の本を読んでいるだけであつた。光にりんかくをつくられている女の姿は、こちらから見ると、泰西名画にある婦人像のようで、この世の人とも思えぬ、静かすぎるくらいでも、邪魔にはならぬ。

給仕女には、こんな眺めは、日常の茶飯事であり、いまさら瞳をひからせるほどでもなく、映画雑誌にうつとり見とれている。

テーブルの下、女の靴がうごいて、男の靴先を、ぐつと押した。男の靴が、それを押し返した。

「こらッ」

と、男の方がいつた。

「何んでえ」

と、女が応じた。

そこで、笑みをふくんだふたりの眼が、近々と見合つた。

なかなか意味深長な眼で、云つてみれば、お互がすでに、相手の肉体を知り合つていて、それを感じだし、うつしている、熱つばい眼である。

女が、ストロウから口をはなした。急に、真面目な顔をつくつて、

「さア、忘れないうちに、二十万円を頂戴」

と、右の掌を、男の鼻先につきだした。

二

「二十万円？」

と、男はストロウをくわえたまま、眼の前に、頂戴々々とひらひらしている女の掌と、顔を、半分半分に上眼で見た。

「そうよ」

男はやつと顔をあげて、

「二十万円とはへんな金額だな」

「しらばくれるのは嫌ッ」

女の声にいきなりがこもつた。

「それは、大いに同感だ。しらばくれるのは悪い趣味だ。しかし——」

「まだ！」

と、女は歯痒い、唇を噛みしめる表情で、男をにらんだ。

「香椎さん、二十万円やるといつたやないの」

「ほう。いつ」

「あんとき、あの前に……」

女は、ちよつと意味ありげな、ようすをつくつたが、瞳はだまされぬぞ、と光つている。

「ああ、あのときのことか」

「あたしは、しんけんよ」

「伊豆子は二十万円を何に使うんだ」

「二十万円があつたら」

伊豆子の表情が柔くなつた。うつとり、夢を描く、可愛い娘になり、瞳を細くして、

「そうね……。先ず、服がほしいの。それから靴、靴下。いつそ二十万円で、家を買つたら、どうかしら？」

「二十万円で家を買うのか？」

「ぜいたく、云わないわ。九尺二間の家でもいいの」

「なかなか、古風な趣味もあるんだね」

「趣味やないわ。苛烈極まる現実の問題だわ」

「その家でどうするんだ」

「結婚すんのよ」

「ほう。ロマンチックだね、結婚の相手は、誰だい？」

「分つてゐるくせに……」

伊豆子の顔がすこしあくなつた。

「ところが、分つてないんだ」

「意地悪。香椎さんとよ」

「僕と？ これは、足許から火が吹きはじめたようなものだ」

「いま頃になつて、何をいつてんのよ。さア、早う二十万円頂戴」

「これは困つたことになつた。あのときは、会社の青木や、西田みたいな真似をすれば、十万円や二十万円ぐらい、わけはない、といつただけなんだ。すると、伊豆子が、横からその二十万円を頂戴といつたから、ああ、やるよ、と返辞したんだ。どうも、まだ、あの連中の真似はちよつと、降参だ。しかし、今は、二十万円どころか……」

香椎がいい気持で喋つてゐると、伊豆子の顔がしだいに険しくなつてきた。

「嘘つき！」

伊豆子のしなんだ右の掌が、さつと動いて、香椎の頬に、パシッと激しい音をたてた。

片隅の影絵のような女が、びつくりしたように顔をあげて、こつちを見た。

細い眉、恰好のいい鼻筋、まるまつちい顎、牡丹の花弁を想わせる唇許、殊に、濃い睫毛におおわれた、黒目勝ちの智的にりんとはつた瞳が、あきれたようにひらかれて、何んとも、よかつた。肌が綺麗で、肉がついて、人妻の気品と、女ざかりのなまめかしさが、ほのぼのと、その身邊に、匂つていようだ。くすつと祕をやかにわらつて、つつましくすぐ面を伏せた。

殴られた香椎はおこつたとも見えぬ、やれやれという、しかし、しんに性根のすわつた顔で、「殴られて、二十万円の借が帳消しになるんなら、近頃、こんなうれしいことはない。キリストいわく、汝、左の頬を打たれたるとき、更に、右の頬を出すべし。香椎竜三いわく、しからば、たちまちにして、二十万円の貸ができあがる」

と、いつて、ほんとうに、右の頬を、伊豆子の前に、ぬつとつきだした。愛情の翳る眼が、伊豆子のおこりかたを、たのしんでいる。

伊豆子は、愈々口惜しい顔になり、

「冗談やないのよ！」

叫ぶと同時に、こんどは左の掌に、思いきり力をこめて、香椎の右頬を狙つた。

「おつと、危い」

香椎の顔が、すうつとひかれて、伊豆子の掌が、勢いあまつて、むなしく空間を泳いだ。

「回収不能の二十万円では、痛い目をするだけ損、というものだ」

「ああ、口惜しい」

伊豆子は地団駄をふんだ。瞳がキラキラ光っている。

香椎は悪意のない鷹揚な素振りで煙草をとりだし、胸いつばいに吸ったけむりを、ふつと伊豆子の顔に吹きかける。伊豆子は、そのけむりを荒い手つきで払うと、もう我慢がならぬ顔でにらみすえた。

「口惜しいのは、僕の方だよ」

「まア、どうしてなの？ さア、いつて頂戴。さア」

「だつて、伊豆子は生娘でなかつたじやアないか」

香椎はとつさにいいたいことを真正面からずばりといつた。

「まア、ひどい！」

伊豆子の顔色が、さつと変つた。くくつと咽喉の奥の方で鳴つたかと思うと、

「ひどい、ひどいわ！」

瞳の奥から、泉のように濡れてきて、わつとテーブルの上に泣きふしてしまつた。

あんまり態度がしんけんなので香椎は、おや？ と思う。

伊豆子は急に起ち上つた。怨めしい瞳で、香椎を見たが、さつと踵を返し、憤然と怒つた、蹴る

ような歩きかたで、扉の外へ消えていつた。香椎も流石に弱つた顔で起ち上つた。

何気なく、片隅の女を見た。女もこつちを見ていた。ふたりの眼があつた。香椎の顔が今迄と別人のように、急にきりりと引きしまり、眼が異様に輝いてきた。女の顔に、おだやかな微笑が花のようにひろがつた。

「奈つちやんじやないか！」

彼の声には、感動が溢れていた。

四

香椎はつかつかと、女の方へ歩いていつた。女は、ちよつと身を引くようにして、香椎を見あげる。深々とした瞳が、なつかしがつている。

「竜三さん、でしょう？」

やや首をかしげる云いかたは、十年前とすこしも變つていない。歲月の距離が、香椎の胸のなかで、一瞬に粉碎され、疼くような歎息が体の隅々にはしつた。

香椎は奈々江の前の椅子に、どしんと腰を下ろした。そのまま、覗きこむように、しげしげと奈々江を見つめる。やわらかい光をうけて、明るく浮かびあがつた顔。若やいだ頬にはほのかな赤みがさしている。

香椎の頭腦のなかには、十年前の秋、奈々江と歩いた、しきりに落葉する御堂筋の並木が、あざやかに、うかんでいた。それが、はつきり恋愛の形式にうつる前に、香椎は応召し、奈々江が十五歳になるまで、隣同志であつたというだけの、それ以後の交際も感情の熟するまでにいたらず、結局は、幼馴染に終つたのだけれども、あの娘が、このようにふくよかな女になつたのかと思えば、あのまま、応召さえしなければ、当然に自分の腕の中に、いだきしめられる筈であつた掌中の珠玉を、むざむざと他人に奪われてしまつた無念さが、腹底からこみあげてくる。

その他人というのが氣に喰わぬ。何んでも、奈々江より三十歳近くも年の違う男だ、と聞いている。そんな男がいかなる理由があつたにしろ、このような女を妻にするのは悪徳というものだ。

「奈つちやん、幸福？」

香椎は何氣ない顔で訊ねる。

「……」

答えはなかつたけれども、はにかんだ素振りには、いかにも、満ちたりた幸福な人妻の姿であつた。高雅な花束のようでさえある。

香椎はいらいらしてくる。

「奈つちやんの主人は、随分年上だそうじゃないか。そんな男が奈つちやんを幸福にしてくれるなんて、僕は信じられない。戦地で、僕はそのことを知つたとき、星空に向つて、奈つちやんのバ

カ！ と叫んだよ。しかも、相手が再婚で、奈つちゃんのお父さんの会社の重役だったんだなんて、明治時代の新派悲劇だよ」

「いいえ、とてもやさしくしてくれるひとですわ」

奈々江はきつとたしなめる瞳で香椎を見つめたが、ふつと、話題を変えるようにいつた。

「竜三さん、いま、おつとめ？」

「うん。北浜の建築会社につとめている」

「あのう……。さつきの女のかたは？」

「ああ、あれは会社の女事務員なんだよ。あッ、いけねえ。さつきからの醜態を、すっかり、奈つちゃんに、見られていたんだな。こいつは、大失敗だった」

「とても、幸福そうでしたわ」

「飛んでもない。それより、僕はたつたいまから、はつきり自分の不幸を認識したんだ」

「どうしてですの」

「奈つちゃんに、めぐりあつたからさ」

香椎が、もつと外の言葉を続けようと、テーブルの上に、体をぐつとのりだしたとき、

「あら、奈々江さん」

と女の声がふたりの頭の上で聞えた。ふたりがハッと顔をあげると、ちょうど外出から帰つて来